# 古今和歌六帖の万葉歌と天暦古点

田中　智子

## はじめに

『古今和歌六帖』（以下『古今六帖』）は約四五〇〇首の歌を採録した大部の私撰集である。なかでも、全体の四分の一以上を占める一二〇〇首近くが万葉歌であることは注目に値しよう。これらの万葉歌は、『古今六帖』による『万葉集』享受のありようを考えるうえでも、『万葉集』の古訓について考えるうえでも重要な資料であると思われる。

そもそも『古今六帖』は十世紀後半頃に成立したとされており、それゆえかつて山田孝雄氏[1]は、天暦古点を伝える資料として『古今六帖』を顧みる必要があると指摘した。しかしながら、『古今六帖』の万葉歌には『万葉集』の本文と大きく相違するものが存することから、それらのなかに「伝承歌を供給源と」するものが少なくないとの指摘がなされ[2]、山田氏のこの見解は大幅な修正を余儀なくされる。そののち長らく、『古今六帖』の万葉歌と『万葉集』の古点との関係が論じられることはほとんどなかったように思われる。

しかし、『古今六帖』の万葉歌に、『万葉集』の漢字本文から逸脱した特異な本文を有するものが少なくないことは確かであるにせよ、そのことが直ちに、互いに成立時期の近い『古今六帖』と古点とがまったく無縁の存在であることを意味するわけではあるまい[3]。本稿の目的は、『古今六帖』の万葉歌の本文と古点の訓との比較検討を通じて、『万葉集』の古訓を伝える資料としての『古今六帖』の意義を再考することにある。

## 一　古今六帖と万葉集

もとより『古今六帖』の万葉歌と古点との関係性を明らかにすることは容易ではない。その要因は様々にあろうが、それらを稿者なりに整理すれば、

1、天暦古点本が現存せず、古点の訓を正確に知るのが困難であること

2、『古今六帖』の伝本が中世末期以降のものしか現存せず、その本文には乱れが少なくないとされること

3、『古今六帖』が撰集資料とした『万葉集』がどのような形態のものであったのか（附訓本だったのか、全二十巻が揃っていたのか等）が明らかではないこと

以上の三点が特に問題となろう。ただし、1については近時、小川靖彦氏[4]によって、桂本と次点本諸本の共通訓を通じて古点の具体相をうかがいうる可能性が指摘された。本稿ではこの指摘をふまえたうえで、『古今六帖』と古点との関係について再検討したい。

また、2についても、『古今六帖』の諸伝本のうち、写本系伝本の本文が古態を伝えている場合が少なくないことが福田智子氏[5]によって明らかにされている。誤写等の可能性を考慮する必要があるにせよ、写本系伝本をもとに『古今六帖』の万葉歌の本文を検討することで、『古今六帖』と『万葉集』の古訓の関係性に迫る余地は充分にあるといえよう。

さて、3は、『古今六帖』がどのようなかたちで『万葉集』を撰集資料としたのかを考えようとする本稿において、考察の前提ともなる重要な問題である。そこで本節では、『古今六帖』がそもそも『万葉集』を撰集資料となしえたかについて再検討を加えておきたい。

先述したように、『古今六帖』の万葉歌には伝承歌を供給源とするものがあり、また、『新撰和歌』や『後撰集』等を通じて採録されたものも存するとみられるが[6]、一方で、『万葉集』から直接採歌された可能性が高い歌が少なからず含まれていることも確かである。例えば、『万葉集』で連続して配されている歌がその歌序のままに採録されている箇所（「万葉連番歌」）などは、基本的には『万葉集』から直接採られたものとみてよいと考えられている[7]。また、従来指摘されてきた「万葉連番歌」以外にも、『万葉集』の特定の巻の歌が『古今六帖』にまとめて採録されている箇所は多く存しており、これらの歌も『万葉集』から直接に採られたものである可能性があろう。例えば、『古今六帖』第四帖「恋」項「恋」題の二〇〇〇～二〇〇八は、二〇〇六が『古今集』歌であるのを除けば、すべて『万葉集』巻四の歌となって

いる。その八首の『万葉集』での歌番号を順に掲げると、

　五九五、六〇五、六七八、七四八、七五〇、七五一、
　七五三、七五五

となる。『古今六帖』における歌の配列が『万葉集』での歌序と一致しており、これらの歌も『万葉集』から直接採歌された可能性が高いと思われる(8)。

　ただし、『古今六帖』が『万葉集』を撰集資料としたとみてよいとしても、それが直ちに、『古今六帖』が『万葉集』の二十巻すべてを撰集資料としたことを意味するわけではないだろう。というのも、『古今六帖』の万葉歌にみられる、『万葉集』の巻ごとにおける採歌率の顕著な偏りは、単に各巻の所載歌の表現や内容の差異のみに起因するものとは考え難いからである。例えば巻四・巻十一からは四〇%以上の歌が採歌されている(9)にもかかわらず、巻十八からは一首も採歌されていないことは看過できない。

　そもそも巻十八は、大伴家持の越中時代の作を中心に収めた巻々（巻十七～巻十九）の一部であり、それらの巻は連続した内容を有している。しかしながら、『古今六帖』には、巻十七の歌が一四二首中九首、巻十九の歌が一五四首中四一首採録されている一方で、巻十八の歌は一首も採録されていないのである。『万葉集』巻十八については、複雑な伝来の過程を経ている可能性があるとされており、古点の成立時期の頃に破損があったとの指摘もあることを合わせ考えれば(10)、『古今六帖』編者が、少なくとも巻十八を目にしえなかった可能性を考慮する必要があると思われる。

　なお、平安朝には『万葉集』が「巻やそれ以下の単位(11)」で流布していたことが指摘されており、『古今六帖』がそのような万葉集抄を資料とした可能性もある。巻十二に関しては、夙に新沢典子氏(12)によって、『古今六帖』の参照した『万葉集』巻十二が、「作者未詳歌のみで成る真名書きの歌集」、しかも「校合資料として用いられた側の（あるいはその系統の）歌集であった」可能性があるとの指摘がなされている。稿者も新沢氏の見解に左袒したいが、一方で、『古今六帖』が撰集資料とした『万葉集』の巻々のすべてが「真名書きの歌集」であったか否かについては検討の必要があると思われる。

　これらの諸点をふまえ、本稿ではひとまず『万葉集』巻四の歌に焦点を絞り、『古今六帖』が撰集資料とした『万葉集』の形態について考察してみたい。巻四を考察の対象とする理由は二つある。一つは、『古今六帖』が『万葉集』巻四を直接の撰集資料とした可能性が高いことである。というのも、『人麿集』等の他の「仮名万葉」には『万葉集』巻

四の歌がほとんど採歌されておらず、[13]巻四の歌は十世紀後半頃にそれほど流布していなかったともみられるが、『古今六帖』には巻四の歌が大量に採歌されていることからして、『古今六帖』はそれらの歌を『万葉集』から直接採歌したものと考えられる。先述したように、巻四の歌のなかに『万葉集』の配列に従うかたちで『古今六帖』に採歌されたものが存することも、この推測を裏付けていよう。もう一つは、巻四のみ『万葉集』現存最古の写本であり、古点を伝えるとされる桂本が残存していることである。『古今六帖』の万葉歌の本文の性格を考えるに際して、桂本の訓との比較は重要な意義をもつと考える。

ここで予め、『古今六帖』が資料とした『万葉集』巻四の形態についての本稿の見通しを述べておこう。『古今六帖』所載の『万葉集』巻四の歌のなかに、古点の特異な訓と一致する本文が散見することによれば、『古今六帖』編者が古点の訓（あるいは古点の成立に近い時代の古訓）を参照した可能性があるとみられる。つまり、『古今六帖』が撰集資料とした『万葉集』巻四は、漢字本文のみから成る真名本ではなく、仮名書きの訓を有する本だったとみるべきではなかろうか。以下、具体例に即してこの問題を考えてみたい。

## 二　古今六帖の万葉歌と古点（一）

先述したように『万葉集』の天暦古点本そのものは散逸してしまったが、小川靖彦氏[14]によれば、「桂本と次点本諸本に共通する訓」が「天暦古点である可能性が高い」という。氏の指摘をふまえたうえで注目したいのは、『古今六帖』の万葉歌の本文に、それらの「桂本と次点本諸本に共通する訓」と一致する箇所が少なくないことである。特に、『万葉集』の漢字本文に即応しない特異な訓についても両者が一致する場合があることは看過できない。ここで、漢字本文に即さない特徴的な訓が『古今六帖』と桂本・次点本諸本とで一致する例を具体的に確認し、『古今六帖』の万葉歌と古点との関係を考えてみたい。

（以下、桂本によって『万葉集』の漢字本文を掲げ、続いて『古今六帖』の永青文庫本（中世末期に書写された、現存最古の写本）の本文を、次に『万葉集』桂本の訓と西本願寺本の訓を載せた。桂本の訓のあとには次点本諸本の訓の異同を、西本願寺本の訓のあとには仙覚本諸本の訓の異同を示した。なお、本稿で検討を加える句のみ異同を掲げたが、その際、それが何句目の訓であるかを①～⑤の番号で示した（例えば第二句であれば②）。ただし仮名遣いの異同は考慮しない。また『古今六帖』については桂宮本

・寛文九年版本の本文も確認し、重要な異同がある場合にはその都度注記した）

A百年尓　老舌出而　与余牟友　吾者不厭　戀者益友
（四・七六四②）

〈六帖〉も、とせにおいくちひそみなりぬともわれはわすれすこ（し）ひやますとも　（おむな・一四〇九）

〈桂〉も、とせにおいくちひそむよ、むともわれはいとはしこひはますとも

（元「おひくちひそみ」、廣「オイクチヒソミ」、紀「オヒシタイテ、」）

〈西〉モ、トセニオイシタイテ、ヨ、ムトモワレハイトハシコヒハマストモ

（仙覚本諸本も同じ（なお西左・矢左「オイクチヒソミ」、京左「オイクチヒソニ」）

Aの第二句は、今日では「おいしたいでて」と訓み、「年老いたために歯が抜け落ちて舌が出ているさま」の意に解するのが通説である。一方で桂本には「おいくちひそむ」とあり、元暦校本・廣瀬本にも「おひくちひそみ」・「オイクチヒソミ」とあることによれば、古点では、「おいしたいでて」ではなく「おいくちひそむ（おいくちひそみ）」と訓まれたものとみられる。おそらくは、「老い舌出でて」という他に用例のない、解釈の難しい表現を避け、平安朝の人々にとって理解しやすいように「老いくちひそむ（老いくちひそみ）」（年老いて口元がゆがむ）と訓読したのであろうが、それが、「老舌出而」という漢字本文に即応しない、多分に意訳的な性格の訓であることは確かであろう。

ここで留意したいのは、当該万葉歌が、『古今六帖』においても、古点と酷似（あるいは一致）する「おいくちひそみ」の本文で採歌されていることである。「おいくちひそみ」が漢字に即さない特異な訓であることを考慮すれば、『古今六帖』編者が真名書きの『万葉集』を独自に訓んだ結果、偶然に古点と同じ「おいくちひそみ」の訓になったとは考え難い。『古今六帖』の撰集資料となった『万葉集』巻四が、もともと「おいくちひそみ（おいくちひそむ）」の訓を有していた可能性は高いのではなかろうか。

A以外にも、『古今六帖』の万葉歌の本文が、「桂本と次点本諸本に共通する訓」と一致あるいは酷似している例は散見する。いま、そのなかでも特徴的なものをみてみよう。

B思遣　為便乃不知者　片垸之　底曽吾者　戀成尓家類　（四・七〇七③）

〈六帖〉おもひやるかたはしらねとかたおもひのそこ（ラ）にそわれはこひはなり（ナリニ）にける

（片恋・二〇二七　※④、桂宮本では「そら」）

〈桂〉おもひやるすへのしらねはかたおもひのそこにそわれはこひなりにける

（古も同じ。元・紀・類「かたもひの」）

〈西〉オモヒヤルスヘノシラネハカタモヒノソコニワレハコヒナリニケル

（陽以外の仙覚本も同じ。陽「カタモイノ」）

Bは、『万葉集』の左注に「注二土垸之中一」とあるように、土製の「垸」（食器）の中に書き付けられた歌であった。この左注の記述をふまえたうえで、今日では、当該歌の第三句を「かたもひの」と訓んで「片垸」（蓋のない食器）と「片思ひ」との掛詞となっていると解するのが通説である。確かに、『和名抄』「盌」に「俗云二毛比一」とあり、また中世の『字鏡集』「垸」に「垸同モヒ」とあることなどをふまえれば、「垸」の字は「もひ」と訓むのがふさわしいだろう。

しかしながら、桂本と古葉略類聚鈔に「かたおもひの」とあることによれば、古点では「かたもひの」ではなく「かたおもひの」と訓まれたようである。「かたおもひ」と訓んだ場合、「片垸」と「片思ひ」の掛詞という当該歌の趣向は損なわれてしまうが、にもかかわらず、古点の施訓者は、漢字本文に即さない「かたおもひ」の訓を選びとったことになる。あるいは、平安和歌では「おもひ」の語が広く用いられたのに対し、「もひ」の語が用いられることが極めて少なかったという事情が影響しているのかもしれない。

興味深いのは、『古今六帖』にも、桂本等と同じ「かたおもひの」の本文で採歌されていることである。「おもひ」の訓が「垸」の字に即したものではないことを考慮すれば、やはり当該歌についても、『古今六帖』編者と古点の施訓者がそれぞれ独自に当該歌を訓んだ結果、両者の訓が偶然に一致したとは考え難いように思われる。

C三埼廻之　荒礒尓縁　五百重浪　立毛居毛　我念流吉美　（四・五六八①）

〈六帖〉みさきまひあらいそによるいほへなみたちてもゐても君をしそ思　（崎・一九三九）

〈桂〉みさきまひあらいそによするいほへなみたちてもゐてもわかおもへるきみ

（元・類・紀も同じ）

〈西〉ミサキワノアライソニヨスルイホヘナミタチテモヰテモワカオモヘルキミ

（仙覚本諸本も同じ（なお西・矢・京・陽「ワノ」青））

Cの初句は、仙覚本諸本はいずれも「ミサキワノ」とし、今日では「みさきみの」と訓むのが通説だが、『古今六帖』

と桂本・次点本諸本には「みさきまひ」の訓がみえる。古点では、漢籍の訓読の際に不読の助字として扱われる字（「之」「者」「乎」等）を訓読しない場合が少なくないとされるが、[15]「みさきまひ」もまさしく、「三埼廻之」の「之」の字を訓まない特徴的な訓法の一例といえよう。古点の施訓者は、「廻」の字を「まひ」と訓んだうえで、初句を五音に整えるために「之」の字を不読としたものとみられる。なお、「みさきまひ」の訓は解釈しづらいが、波が岬の周囲をめぐるように寄せるさまの意となろうか。

以上、『古今六帖』の万葉歌の本文に、古点の特徴的な訓と一致するものが少なくないことを確認してきた。繰り返しになるが、このような事例が複数の歌にわたってみられることは、『古今六帖』が、仮名書きの訓を有する『万葉集』巻四を撰集資料とした可能性を示唆しているように思われるのである。紙幅の都合上それらの例すべてを掲げることはできないが、注目すべきものを左にいくつか示しておこう。

○今夜之（四・五四八①[16]）

〈六帖〉こよひのや（暁に起く・二七四〇）〈桂〉こよひのや（元も同じ。紀「コノヨノヤ」）〈西〉コノヨラノ（仙覚本諸本も同じ（なお西・矢・京・陽「ノヨラノ」青。西左・温左・宮左「コノヨハノ」、京左「コノヨハノ・コノヨルノ」））

○肌之寒霜（四・五二四⑤）

〈六帖〉はたへさむしも（衾・三三三〇）〈桂〉はたへさむしも（元・古・紀も同じ。類「はたさむしかも」、廣「タヱシサムシモ」）〈西〉ハタシサムシモ（仙覚本諸本も同じ（なお西・陽・矢・近・京は上の「シ」青。宮左「ハタヘサムシモ」））

○聞之好毛（四・五三一⑤）

〈六帖〉きくかうれしさ（みゆき・一一二六）〈桂〉きくはうれしも（廣も同じ。元後加「きくかうれしさ」、元墨「きくかうれしも」、古・紀「キクカウレシモ」）〈西〉キクハシヨシモ（仙覚本諸本も同じ（なお西・陽・矢・近・京「ハシヨシ」青。西左「キクカウレシモ」））

右の三つも、漢字本文に即さない古点特有の訓が『古今六帖』と一致する例であり、『古今六帖』の万葉歌の本文が古点の訓と密接な関係にあったことを物語っていよう。

## 三　古今六帖の万葉歌と古点（二）

前節では桂本と次点本諸本とで訓が一致する場合に限って検討を加えてきたが、一方で、桂本が次点本諸本のいず

れの訓とも異なる独自の訓を有している場合もしばしばある。そのような桂本独自の訓が、古点を伝えるものなのか、あるいは桂本が古点を改訓したものなのかを判別するのは容易ではないが、『古今六帖』の万葉歌の本文が古点の訓を少なからず留めていることを考えれば、『古今六帖』の本文との比較検討によって、それらの桂本独自の訓が古点であるか否かをうかがいうる可能性があるのではなかろうか。

D鴨鳥之　遊此池尓　木葉落而　浮心　吾不念國　（四・七一一①②）

〈六帖〉水とりのうかふこのいけのこのはおちてうける心をわかおもはなくに　（水鳥・一四七〇）

〈桂〉みつとりのうかふこのいけにこのはおちうかへるこゝろわかおもはなくに

（元「かもとりのあそふこのいけに」（なお右赭「ウカフ」）、紀「カモトリヲハナチノイケニ」）

〈西〉カモトリノアソフコノイケニコノハオチテウカヘルコヽロワカオモハナクニ

（仙覚本諸本も同じ（なお、温左・陽左「ミツトリイ」、矢左・京左「ミツトリ」））

　Dの初二句の「鴨鳥之遊」は、桂本を除く『万葉集』の諸伝本の訓には「かもとりのあそふ」とある一方、桂本では「みつとりのうかふ」という特異な訓が附されている。「水鳥」は、鴨を含む、水辺に生息する鳥の総称であり、主に「水鳥の」のかたちで「鴨」・「青葉」・「うき寝」等にかかる枕詞として用いられる語であった。桂本の訓「みづとりの」は、『万葉集』の中では他に用例のない「鴨鳥（かもとり）」の語を避け、同時に、「水鳥の」という語の用例が多いことをふまえたうえで、「鴨鳥之」の本文を「みづとりの」と訓んだものと考えられよう。「遊」の字を「うかぶ」と訓むのも特徴的だが、これは「水鳥之浮宿（ミツトリノウキネ）」（万葉集・七・一二三五）の表現などを念頭におきつつ、「遊」の字を意訳したものとみられる。

　ここで問題としたいのは、なぜ、このような桂本独自の特異な訓が、『古今六帖』の本文と一致しているかである。これは一見、『古今六帖』の本文が桂本との対校によって後世に校訂を受けたものとも考えられようが、当該歌が『古今六帖』で「水鳥」題に配されていることからすれば、『古今六帖』の本文は『古今六帖』成立時から「水鳥の」であったとおぼしく、桂本に基づいて『古今六帖』の本文が校訂された可能性は低いと思われる。[17]

　『古今六帖』と桂本とが互いに直接的な影響関係にないとの前提にたてば、「みづとりのうかぶ」の訓が両者に共通

する理由は、それがともに古点に基づくものであったためとみるのが穏当ではなかろうか。「鴨鳥」を水鳥類の総称である「みづとり」と訓む訓法が、「夏葛之」（万葉集・四・六四九）の漢字本文を、蔓草類[18]の総称である「たまかづら」と訓む古点の訓法のありようと通じ合うものであることも、「水鳥の浮かぶ」の訓が古点である可能性を示唆しているように思われる。

　Dと同様に、『古今六帖』の万葉歌の本文と桂本の独自訓とのあいだで、単なる偶然の結果とは思えない一致がみられる例はほかにも存する。いま、そのうち二例を左に掲げよう。

○遠哉妹之（四・七六七②）
〈六帖〉とほみや（都・一二四〇）〈桂〉とほみや〈次点本・仙覚本〉トホクヤ

○昨夜者令還（四・七八一②）
〈六帖〉よむへは（来れど逢はず・三〇二三）〈桂〉よむへは〈元〉ようへは〈元赭〉ヨモヘハ〈紀・仙覚本〉ヨフヘハ

　このような事例が複数あることは、『古今六帖』編者が、仮名書きの訓を有する『万葉集』巻四（古点本そのものであるかは即断し難いにせよ、古点と極めて近い時代の古訓を伝えるとみられるもの[19]）を目にしたことの証左となりうると同時に、翻って、『古今六帖』を通じて『万葉集』の古点の姿を推測しうる可能性を示しているように思われるのである。

## 四　古今六帖の万葉歌の本文の変容

　前節までは、『古今六帖』の万葉歌の本文と桂本等との訓の一致箇所のみに注目し、『古今六帖』が『万葉集』巻四の古訓点をふまえている可能性を考察してきた。しかしながら同時に、『古今六帖』の万葉歌には、とても古点の訓を伝えているとは考え難い本文をもつものも散見するのであり、その理由をどのように捉えるかは重要な問題であろう。

　例えば『古今六帖』の本文が桂本の特徴的な訓と一致するものとして例示したBにも、『古今六帖』の本文と桂本の訓とで相違する箇所がみられる。

B思遣　為便乃不知者　片垸之　底曽吾者　戀成尓家類（四・七〇七）
〈六帖〉おもひやるかたはしらねとかたおもひのそこにそわれはこひはなりにける（片恋・二〇二七）

　Bの第二句は、桂本以下の諸本が「すへのしらねは」と附訓する（元のみ「すへなしらへは」）ところを、『古今六帖』では「かたはしらねと」の本文となっているのだが、その

背景には、「思ひやる」の語の和歌中の用法が、上代から中古にかけて変遷していったことがあるのではなかろうか。
すなわち『万葉集』では、
……思遣(オモヒヤル)　鶴寸乎白土(タヅキヲシラニ)……　（万葉集・一・五）
思遣(オモヒヤル)　為便乃田時毛(スヘノタトキモ)　吾者無(ワレハナシ)　不相數多(アハステアマタ)　月之経去者(ツキノヘユケハ)　（万葉集・十二・二八九二）
の例があるように、「思ひやる」は、しばしば「たづき（たどき）」や「すべ」の語に上接し、「辛い気持ちを晴らす」の意で用いられる語であった。一方で平安和歌では、「思ひやる」の語が「たづき」や「すべ」の語とともに詠まれることはなくなり、
我が恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれどもゆく方もなし　（古今集・恋一・四八八）
思ひやる方も知られず苦しきは心まどひの常にやあるらむ　（後撰集・雑四・一二八六）
のように、「方」の語とともに用いられることが多くなる。
ここでの「思ひやる」は、「辛い気持ちを晴らす」の意よりも、「思いを遠くにやる」「思いを馳せる」ほどの意に解するほうがふさわしいといえるだろう。『古今六帖』のBでは、「思ひやる」の語の和歌での用法の変遷に合わせるかのようなかたちで本文が変じているのである。

また、Bの第二句について、『万葉集』では「不知者(しらねば)」の順接表現であったところが、『古今六帖』では「知らねど」の逆接表現に転じていることも興味深い。もとの『万葉集』歌の眼目が、思いを晴らす術を知らないために「片もひ」の底に沈んでゆくほかない、諦めにも似た恋の辛さを詠むことにあったとすれば、『古今六帖』歌の眼目は、思いのやり場がないと一方では知りながら、片思いの底に沈むほかない恋心のあやめのなさ――すなわち、片思いがむなしく甲斐のないものと理性では知りつつも、その思いの底に沈んでゆくほかない辛さ――にあると解せるのではなかろうか。『古今六帖』における万葉歌の本文の変容は、時に、一首全体の歌意にも大きく関わっていると考えられる。
Bと同じく、AとCの本文にも、『古今六帖』と桂本のあいだで異同がみとめられる。
A百年尓　老舌出而　与余牟友　吾者不厭　戀者益友　（四・七六四）
〈六帖〉も丶とせにおいくちひそみなりぬともわれはわすれす(し)こひやますとも　（おむな・一四〇九）
Aの第三句は桂本・次点本・仙覚本のすべてが「よゝむとも」と附訓していることからして、古点でも「よゝむとも」と訓読された可能性が高いが、『古今六帖』では「なり

ぬとも」となっている。「よよむ」は『万葉集』中でも当該歌のみにみえる特異な語であり、平安和歌にも用例がない。あるいは、平安朝の人々にとって解釈の難しい「よよむとも」の表現を避けるかたちで「なりぬとも」という本文異同が生じたものとも考えられるが、その際、つぎの歌などの表現の影響があったのではなかろうか。

他言者(ヒトコトハ)　真言痛(マコトコチタク)　成友(ナリヌトモ)　彼所将障(カレニサハラム)　吾尓不有國(ワレニアラナクニ)
(万葉集・十二・二八八六)

……越の国なる　白山の　頭は白く　なりぬとも……
(古今集・雑体・一〇〇三／古今六帖・四・長歌七首・二五〇六)

右の二首はいずれも「なりぬとも」という句を含むが、特に『古今集』歌では、「頭は白くなりぬとも」と、老いを詠む表現のなかに「なりぬとも」の句が見えており、同じく老いを詠んだAの表現に与えた影響は小さくなかったと思われるのである。

また、第四句の「吾者不厭」は、桂本以下の諸本で「われはいとはし」と訓読されており(京のみ「ワレハイトハス」)、古点でも「われはいとはし(いとはす)」と訓まれたものと考えられるが、『古今六帖』(20)では、左の歌をはじめとする複数の万葉歌にみられる類句「我は忘れず」のかたちになっている。

木國之(キノクニノ)　飽等濱之(アクラノハマノ)　忘貝(ワスレカヒ)　我者不忘(ワレハワスレス)　年者雖歴(トシハフレトモ)
(万葉集・十一・二七九五／古今六帖・三・貝・一九〇二)

A歌の第三句にこのような本文の変容が生じた理由は定かではないが、「厭はじ(厭はず)」が、平安和歌に用例のない、平安朝の人々にとって馴染みのない表現であった一方で、「忘れず(忘れじ)(21)」が、平安和歌でもしばしば用いられる表現であったゆえのことと考えられる。

C三埼廻之　荒礒尓縁　五百重浪　立毛居毛　我念流吉美
(四・五六八)

〈六帖〉みさきまひあらいそによるいほへなみたちてもゐても君をしそ(こそまてイ)思
(崎・一九三九)

Cの末句は、桂本以下の諸本に「わかおもへるきみ」とあることから、古点では「わかおもへるきみ」と訓まれたとおぼしいが、『古今六帖』では、つぎの二首の万葉歌にみられる「君をしぞ思ふ」の表現へと本文が変容している。

秋去者(アキサレハ)　鴈飛越(カリトヒコユル)　龍田山(タツタヤマ)　立而毛居而毛(タチテモヰテモ)　君乎思曽念(キミヲシソオモフ)
(万葉集・十・二二九四)

遠津人(トヲツヒト)　猟道之池尓(カリチノイケニ)　住鳥之(スムトリノ)　立毛居毛(タチテモヰテモ)　君乎之曽念(キミヲシソオモフ)
(万葉集・十二・三〇八九)

参考)春楊(ハルヤナキ)　葛山(カツラキヤマニ)　發雲(タツクモノ)　立座(タチテモヰテモ)　妹念(イモヲシソオモフ)

（万葉集・十一・二四五三）

右の三首をみるに、『万葉集』ではしばしば「立ちても居ても……をしぞ思ふ」の表現が用いられたことが知られるが、「……をしぞ思ふ」の句が、『万葉集』のみならず平安和歌にも類型表現として定着していたことに留意が必要であろう（例えば「唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」（古今集・羇旅・四一〇））。ここでもやはり、『古今六帖』の万葉歌の本文が、平安和歌としてより自然なものへと変じているのである。

以上、『古今六帖』の万葉歌の本文が、時に『万葉集』の古点の訓を大きく離れ、より平安和歌として解しやすい歌句に変わっている場合があること、そしてそれらの歌句に、他の万葉歌等にみられる類句からの影響を思わせるものが少なくないことを考察してきた。もちろん、このような万葉歌の本文の変容は、『古今六帖』のみならず、『赤人集』『人麿集』『家持集』等のいわゆる「仮名万葉」一般に広くみられる事象ではある。[22] しかし同時に、これらの『古今六帖』の万葉歌の本文が、いずれも、『万葉集』の古訓点をふまえたとみるほかない特異な訓を含んでいたことを改めて想起したい。

畢竟、『古今六帖』が撰集資料とした『万葉集』巻四は、十世紀中頃に行われた『万葉集』の訓読作業の成果をふまえた、仮名書きの訓を有する本であった可能性が高いとみられる。そしてその訓は、漢字本文に忠実であることよりも、平安和歌としてより馴染み深い表現であることを重視しての変容を遂げたものであったのだろう。つまるところ、『古今六帖』編者が目にした『万葉集』巻四は、現存の『赤人集』――『万葉集』巻十前半部の歌をほとんど『万葉集』の配列のままに採歌するが、その本文には『万葉集』の漢字本文から逸脱した箇所も少なくない――のように、遡れば『万葉集』そのものに端を発するものではあるが、伝来の過程で本文に少なからぬ異同の生じた、いわゆる「仮名万葉」に近いものであった可能性が高いと考えられるのである。[23]

## おわりに

本稿では、『古今六帖』の万葉歌に古点の特徴的な訓と一致するものが少なくないことを指摘し、また一方で、その本文には、『古今六帖』独自の平安和歌的な変容が生じてもいることを検討してきた。こうした本文の揺らぎゆえに、長らく、古点を知るための資料としての『古今六帖』の意義は等閑視されてきたといえようが、古点の具体相が明ら

かにされつつある今日、改めて、『古今六帖』の万葉歌と古点との関係性を問い直す必要があるのではなかろうか。『古今六帖』と古点との関係を探ることは、『万葉集』の古訓のありようを知る資料として『古今六帖』を位置づけ直すうえで重要であると同時に、十世紀後半頃の万葉歌享受の様相の一端をうかがい、更には『古今六帖』がどのような態度で万葉歌を摂取したのかを考えるうえでも欠かせないことであると考えられる。

【注】

※『万葉集』の本文と訓は特に断らない限り西本願寺本（『西本願寺本萬葉集（普及版）』主婦の友社・おうふう、一九九三～一九九六年）に拠り、その他諸本の本文と訓は『校本萬葉集』に拠った。また、勅撰集と『新撰和歌』の引用は『新編国歌大観』に、『古今六帖』永青文庫本は『細川家永青文庫叢刊　古今和謌六帖　上・下』（汲古書院・一九八二～一九八三年）に、桂宮本は『図書寮叢刊　古今和歌六帖　上』（養徳社、一九六七年）に拠った。なお、『和名抄』は京都大学文学部国語国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』に、『字鏡集』は中田祝夫・林義雄編『字鏡集　白川本影印編』に拠った。

(1)「万葉集と古今六帖」（『萬葉』三、一九五二年四月）

(2) 大久保正「古今和歌六帖の萬葉歌について」（『萬葉の伝統』塙書房、一九五七年）

(3) 平井卓郎「古今和歌六帖と万葉集」（『古今和歌六帖の研究』明治書院、一九六四年）は、「桂本と六帖との不一致は大いに期待に背くものがあり、六帖が果たして古点を伝へたかどうか疑はしいことになり古点とは別に古伝誦のままを伝へた場合があり得る」とし、「いはゆる古点の姿を明確に把握するのは困難」であるとした。確かに桂本の訓と『古今六帖』の本文のあいだに相違点が少なくないことには留意が必要だが、そもそも桂本自体が古点の訓を忠実に伝えるものではないことを考慮するべきであろう。

(4)「天暦古点の詩法」（初出一九九九年、『萬葉学史の研究』おうふう、二〇〇七年）

(5)「題と本文の間―『古今和歌六帖』諸本の本文異同と『万葉集』―」（『同志社国文学』七八、二〇一三年三月）

(6) 例えば本稿で検討の対象とする『万葉集』巻四の歌でいえば、「八百日往（ヤホカユク）　濱之沙毛（ハマノマサコモ）　吾戀二（ワカコヒニ）　豈不益歟（アニマサラメヤ）　奥嶋守（オキツシマモリ）」（四・五九六）は、『古今六帖』に「なぬかゆくはまのまさことわかこひといつれまされりおきつしらなみ」（古今六帖・恋・一九八八）という『万葉集』と大きく異なる本文で採歌

されている。おそらくは『新撰和歌』の「なぬかゆくはまのまさごとわが恋といづれまされりおきつしら波」(二三二)に拠ったものだろう。

(7)池原陽斉「『古今和歌六帖』の「萬葉連番歌」一覧」(『日本文学文化』一三、二〇一四年二月)。また、池原陽斉「赤人集と古今和歌六帖―十世紀後半の萬葉歌の利用をめぐって―」(『萬葉集訓読の資料と方法』笠間書院、二〇一六年)は、『古今六帖』が『赤人集』を撰集資料としたとする滝本典子「古今六帖と赤人集」(『皇学館論叢』一―四、一九六八年十月)の説に再検証を加え、その論証方法の問題点を指摘したうえで、『古今六帖』が『赤人集』ではなく『万葉集』から採歌した可能性が高いことを明らかにしている。

(8)『貫之集』歌についても同様の配列がなされた箇所があり、『古今六帖』が『貫之集』を撰集資料とした可能性が指摘されている(青木太朗「『古今和歌六帖』の配列をめぐって―編纂意識の一側面」(『和歌文学研究』八三、二〇〇一年十二月)。

(9)巻四の三〇九首中一四七首、巻十一の五一四首中二一一首が採歌されている。なお、以下、『古今六帖』の万葉歌については、おおむね三句以上の歌句が『万葉集』と一致し、歌意に大きな差異がみられないものを同歌と認定して採歌数(重出を含めた「延べ歌数」ではなく、重出を含めない「異歌数」(実歌数))を掲げた。また、万葉歌の認定に際しては、中西進『古今六帖の万葉歌』(武蔵野書院、一九六四年)を参考にしたが、同書では『古今六帖』一五九五番歌の出典として『万葉集』巻七・一一四一と巻十七・四〇二二の両首を挙げるところ、本稿ではその出典を巻七・一一四一のみと認定し、同書が万葉歌と認定しない一九三二番歌の出典を巻十九・四一四六と認定した。

(10)大野晋「万葉集巻第十八の本文に就いて」(『国語と国文学』二二―三、一九四五年四月)。なお、巻十八補修説に対する批判もある(乾善彦「『万葉集』巻十八補修説の行方」(『高岡市万葉歴史館紀要』一四、二〇〇四年三月))。

(11)新沢典子「古今和歌六帖と万葉集の異伝」(『日本文学』五七―一、二〇〇八年)

(12)注11新沢論文

(13)『人麿集』には一〇首、『家持集』には二首採歌されているが、『赤人集』には一首も採歌されていない。『古今六帖』の『万葉集』巻四の本文には『人麿集』等との不一致も多く、これらの歌集から採歌した可能性は低いと思われる。『古今六帖』が『赤人集』や『家持集』を撰集資料とした可能性が低いことは既に指摘がある(『赤人集』については注7池原論文、『家持集』については鉄野昌弘「家持集と万葉歌」(鈴

木日出男編『ことばが拓く古代文学史』笠間書院、一九九九年）に詳しい）。

（14）注４小川論文

（15）注４小川論文

（16）「こよひのや」は、初句の字足らずを避けて五音節句とするために助詞「や」を補ったものだろうが、漢字本文「今夜之」から直接に導かれる訓とは言い難い。古点では字余りを避けるために漢字本文を犠牲にする場合があるというが（注４小川論文）、これは、それとは反対に、字足らずを避けるために漢字本文にない語を補って訓読した例といえる。

（17）福田智子「『古今和歌六帖』と嘉暦伝承本『万葉集』―『万葉集』の訓の生成と流布について―」（『社会科学』一〇二、二〇一四年五月）は、巻十一・二五〇四の「浮沙」（現行訓「うきまなご」）が、嘉暦伝承本等の訓と『古今六帖』の本文では「うきくさの」とあり、かつ『古今六帖』で「浮草」題に配されていることを指摘する。これはDと同様の事象として注目される。ただし福田氏は「『古今和歌六帖』の万葉歌は、これ以後の『万葉集』の訓、とくに非仙覚本の訓に、少なからぬ影響を与えたのではないか」とするが、稿者はむしろ『古今六帖』が『万葉集』の古訓をふまえている可能性があると考える。

（18）注４小川論文

（19）古点以前から『万葉集』の訓読作業が行われていたとの指摘もあり（大久保正「古代萬葉集研究史稿（その二）―古点以前の萬葉研究―」（『北海道大学文学部紀要』十、一九六一年十一月）等）、これが古点本そのものだったかは特定できない。

（20）四・五〇四、四・七〇二、七・一二三〇、十一・二七九五、十七・三八九四。

（21）飛鳥川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人は忘れじ（古今集・恋四・六八七）等。

（22）注13鉄野論文は、『家持集』での万葉歌の本文の変容について、それは「単に万葉集の解読というより、一首の可能性を探って行く、再生産の営みともいえ」ると指摘する。

（23）ただし『古今六帖』編者が分類題に合わせ本文を改変した可能性も指摘されている（青木太朗「『古今和歌六帖』における万葉集歌についての一考察―題との比較を通して」（久保木哲夫編『古筆と和歌』笠間書院、二〇〇八年）、注５福田論文）。確かに『古今六帖』編者が本文を改変した可能性も考慮する必要があるが、少なくとも、一見、題に適合するよう本文が改変されたかにみえる歌のなかに、『万葉集』の古訓と一致するものがあることには留意が必要である。

例えばDについて、青木氏は、「水鳥」という題に合わせての本文改変の可能性を指摘するが、これは本稿の第三節で検討したように、古訓を伝えたものとおぼしい。また「おとめこかたまくしけなるたまくしけみることいまはめつらしや君」（古今六帖・珍し・二九五〇）も、「𡢳嬬等之　珠篋有　玉櫛乃　神家武毛　妹尓阿波受有者」（四・五二二）の本文を「珍し」という題に合わせて改変したものとの指摘がある（注3平井論文）。第四句の「神家武毛」が今日「かみさびけむも」と訓まれることに基づく説だが、桂本では「めつらしけなむ」と附訓されており、これと『古今六帖』の本文「めつらしや君」は無関係に生じたものとは考え難い。なお、『古今六帖』編者による本文改変の可能性については慎重に考えるべきとの批判もある（久保木哲夫「古今和歌六帖における重出の問題」初出二〇一二年、『うたと文献学』笠間書院、二〇一三年）。

［付記］本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費（ＤＣ２）による研究成果の一部である。